

北光犬猫病院

院長

立花 徹 先生

TORU TACHIBANA



獣医師の仕事と歴史

獣医師という仕事の歴史を振り返ると、いつも不思議な感慨があります。私たちが当たり前のように「獣医師」と名乗っているこの職業は、実は社会の変化とともに姿を変え、役割を広げ、時代に合せて育ってきた存在だからです。少し昔話をさせてください。明治18年（1885年）。この頃は、獣医学校や農学校で獣医学を学び、卒業証書を持っていれば獣医師として免許を受けられる時代でした。駒場と札幌の農学校は特に歴史が古く、のちに駒場は東京大学へ、札幌は北海道大学へと発展していきます。札幌で学んだ学生たちが、雪の中を歩いて講義に向かった光景を想像すると、なんだか胸が熱くなります。

そして私は、4年制の最後の世代としてその転換点に立っていた

昭和24年（1949年）、獣医師法が公布され、日本で獣医師になるための道がようやく一本の線として整えられました。「大学で4年以上の獣医学課程を修め、国家試験に合格すること」。今では当たり前の条件ですが、当時としては大きな制度改革でした。その後、世界の獣医学教育とのギャップが問題となり、昭和52年（1977年）に獣医師法が改正されます。翌年の入学者からは大学4年間に大学院修士課程2年を加えた6年間の教育が必要となり、日本の獣医学教育は新しい時代へ踏み出しました。そして私は、その“4年間教育の最後の年”に在籍していた世代です。ちょうど制度が切り替わる、その境界線の上に立っていたわけです。周囲の先生方や学生たちの間でも、「来年からは6年制になるらしい」「教育が大きく変わるぞ」といった話題がよく飛び交っていました。時代が動いていく気配を、学生ながら肌で感じていた記憶があります。

昔の国家試験は“筆答と実技”。緊張感は今とは比べものにならない

私が受けた国家試験は、まだ筆答と実技が残っていた時代です。実技試験の緊張感は、今の学生さんには想像しにくいかもしれません。梓場を前にし、様々な器具機械を差し出され、何という器具か？何に使うのか？どのように使うのか？との問いに的確に答えるという、所作、判断、技術 まさに「獣医師としての姿勢」そのものが試される場でした。試験会場の空気は張りつめていて、手が震えた先生方も多かったと思います。昭和59年（1984年）頃になると、試験はマークシート方式へと変わり、採点が早くなりました。今の若い獣医師に話すと、「えっ、昔は実技があったんですか」と驚かれることもあります。

時代の変わり目に立ち会った世代として

4年制から6年制へ。獣医学教育が大きく形を変えるその瞬間に、私は学生として立ち会いました。昔は授業料が安かったし、おまけに2年間少なくて、卒業できたのは親孝行だったのかもしれませんが。しかし、その分、学ばなくてはいけないことがたくさんあり授業は夜遅くにまでなることが頻繁にあったなどという話をすると、若い獣医師たちは目を丸くします。しかし、制度が変わる前の最後の世代として学んだ経験は、私にとって大切な財産です。時代の変化を横目で見ながら、自分の道を歩んできたという感覚があります。

この頃、世界では獣医学教育に4～5年を充てる国が一般的でした。一方、日本では大学4年間のうち専門教育はわずか2年ほど。世界の獣医教育と大きなギャップがあり、国際交流の場ではどうしても不利でした。そこで昭和52年（1977年）に獣医師法が改正され、翌年の入学者から6年間の教育がスタートします。今の獣医学教育の基盤がここで整ったわけです。

獣医師の仕事は「食を支える」だけではない

私が小学校の頃、実家では北海道犬を飼っていましたが、その頃、小動物病院はなかったと記憶しています。私は若い頃、獣医師国家試験は産業動物のためのものだと思っていました。まだ牛、馬、豚、鶏——食や労働力を支える動物たちの健康を守るための資格だと……。しかし社会を見渡すと、獣医師の仕事は驚くほど広いのです。

- ・ 動物臨床
- ・ 食品衛生
- ・ 公衆衛生（および家畜衛生、予防衛生）
- ・ 動物福祉
- ・ 環境・生活衛生
- ・ 研究
- ・ 教育
- ・ 人と動物の感染症対策



そして昭和59年頃からはペットブームが訪れ、コンパニオンアニマルとの「家族」という関係性が社会に根づきました。獣医療は“食を支える産業”から“心を支える医療”へと、静かに、しかし確実に広がっていったのです。この頃は大学で小動物臨床を専門にしている教員が少なく、卒業してから各々の小動物病院に勤務しながら知識・テクニックを学ぶことが一般的でした。給料も安く、休みも少なく、労働時間も長く過酷でした。それでも、小動物臨床を経験できることは貴重な時間でした。いわゆる丁稚奉公

と言われた時代の話です。

その後、やっと一人前に動物病院を開業し、いろいろな大学から勤務医を雇うようになり、国立大学と私立大学の教育の質の違いに気づかされました。ここで少し、当時の教育の話をさせてください。国立大学では、研究テーマを与えられ、自分で考え、分析し、統計を取り、実験し、理論を組み立てていくような研究者としての姿勢が育つよう教育されます。したがって、目標が見つかり、研究をはじめると、国家試験は二の次になるのです。もちろん、優秀な学生ですので、国家試験の勉強をすれば受かるのですが、研究の方が優先となり、それどころの話ではなくなるのです。一方、私立大学では獣医師国家試験合格が明確な目標。みんなで集まって試験対策をするような、まるで高校の受験勉強のような雰囲気があります。もちろん、それが悪いわけではありません。私自身、その道があったおかげで国家試験に合格し、小動物病院を開業しました。両者に優劣があるのではなく、人材育成の方向性が異なるだけなのです。

その結果として、

- ・国立大学出身者は研究・行政・検疫など専門性を活かす進路が多い
- ・私立大学出身者は開業に進む割合が高い

という傾向が生まれます。ただし、これはあくまで傾向であり、両者の間に境界線があるわけではありません。

日本の獣医学の底力を感じた瞬間 — BSEのとき

忘れられない出来事があります。イギリスで発生した感染症であるBSEが2001年に日本でも確認され、国内が大きな混乱に陥った時のことです。実はその時、日本国内にはBSEを地道に研究していた獣医師が、ほんのわずかですが存在していました。その専門家を中心に国の対策が一気に進み、筑波（つくば市）にある施設にBSE（牛海綿状脳症）の専門研究体制を立ち上げ、日本は危機を乗り越えることができました。私はその時すでに獣医師でしたが、「大学の獣医学

教育が育てた研究者の存在が、まさしく国を救うことがある」という事実を目の当たりにしました。この問題は日本の食品安全行政に大きな影響を与えましたが、獣医師が社会のあらゆる場面で静かに、そしてしっかりと支えているのだということを深く実感した出来事でした。

おわりに

4獣医師という職業は、時代とともに姿を変えながら、社会のいろいろな分野の中で確かな役割を果たしてきました。産業動物、小動物、研究、臨床、公衆衛生、家畜衛生、予防衛生などなど……。それぞれの道にも、さまざまな獣医師の人生があるのだと思っています。獣医師の数だけ、それぞれの物語があります。その一人として、これからも地域とともに歩み続けていきたいと思っています。

